

連歌奉納

9月24日に連歌奉納祭が宇原神社で開催されました。
お題の下の句に、次のとおり上の句が寄せられました。

▼下の句「町はこぞつて 神幸を祝う」

産土の 渡御にしあれば 神ながら 宮司…………… 廣瀬正知
秋晴れに 宇原の神ぞ 出でければ 禰宜…………… 廣瀬理子
豊秋を ことほぐ鉦の 音さえて 氏子会長…………… 三原 茂
産土の 御恵み享けて 稔る秋 氏子会副会長…………… 坂本茂三
過去に無き 厳しい夏を 耐えて秋 氏子会副会長…………… 守 一夫
「暑ツイのう」が挨拶だった夏も過ぎ 氏子会副会長…………… 守中康治
豊作は 神の恵みと 感謝して 氏子会理事…………… 田 淵 朗
産土の 神の御幸に お供して 氏子会理事…………… 官見敦司
五百年 つつき来たりし 神幸祭 氏子会理事…………… 山口由信
宇原社の 神輿かつぎて 若人は 氏子会理事…………… 田畑豊勝
秋晴れの 遠くより聞く 鉦の音 氏子会監事…………… 進谷忠俊
孫たちに 法被着せ掛け そわそわと 氏子会監事…………… 佐藤信一
色つきし 稲の穂波の 麗しく 氏子会監事…………… 篠田智治
若人は ねじり八巻 威勢よく 氏子青年会副会長…………… 宮原広行
幾代も 故郷に響け 祭囃し 氏子青年会事務局長…………… 塚崎智晴
天高く 響きわたる 鐘太鼓 氏子総代…………… 守中清史
秋風や 世は移ろえど 血潮沸く 馬場区同志会顧問…………… 平井雅崇

夏祭り 地域のきずな 深まりて 長畠區山笠保存會会長…嶋村政敏
神さまの 永遠の慈愛の 保護のもと 南原…………… 坂本悦子
酷暑来て 人は静まり みのる秋 尾倉…………… 沖永陽子
親子して 神輿を担ぐ 嬉しさに 尾倉…………… 上田安乃
次の世へ つなぐ平和を 祈りつゝ 与原上…………… 増田直子
偲ぶ月 雲の絶え間に 澄み昇り 神田町一…………… 柳原良行
十月の 再開樂し 例大祭 尾倉…………… 伊倉堂真由美
力込め 押しては曳いて 山車 神田町一…………… 木村 修
カンカンカン 鉦鳴り響く 秋の空 馬場…………… 守中泰子
この夏の 酷暑干ばつ 乗り越えて 馬場…………… 守中光哉
焦げるような 酷暑の夏も やっと去り 東京…………… 守 宏知
矛持ち 神輿お供し 神事場へ 馬場…………… 守中紀子
神輿つく 氏子の姿 勇ましく 馬場…………… 守中享太
山車を曳き 神輿お供し 神事場へ 馬場…………… 守中拓也
暑い夏 過ぎて秋空 黄金色 尾倉…………… 塚崎香織
産土や 陸海空を 誇りとし 神田町三…………… 中村幸彦
恋心 欠けても満ちる 秋の夜半 京町…………… 井上蛙月
一年の クライマックス 君すがし 幸町…………… 山村いづみ



勇壮華麗 苅田山笠

福岡県の無形民俗文化財に指定されている「苅田山笠」は、毎年9・10月に開催される伝統的な祭りです。今年は、山車14基が役場駐車場に集合しました。

なぜ、この町は毎年「本気」になるのか
宇原神社の秋の例大祭として、室町の昔から受け継がれてきた「苅田山笠」。2026年も、鉦卸しを合図に、町は祭り一色に染まりました。

ふだんは静かな町が、この時期だけは表情を一変させます。夜ごとに響く鳴り物、通りを行き交う法被姿、そして年に一度、大きな山車が動き出す——。世代を超えて受け継がれてきたこの祭りは、苅田に生きる人々にとって、暮らしの一部であり、誇りそのものです。

夜を彩る「灯山」——二百の灯りが揺れる

祭りの前半を彩ったのは「灯山」。約二百数個のちようちんに照らされた山車が、鉦と太鼓の音色とともに町を巡行します。夜の闇に浮かぶ淡い灯りの列は、屋の勇壮さとは対照的な、幻想的な美しさがあります。

やがて山笠は「幟山」へ、そして祭りのクライマックスを飾る「岩山」へと、その姿を変えていきます。一つの祭りで三つの表情を見せる——これこそが、苅田山笠ならではの奥深さです。

高さ15メートル、天を突く「岩山」

大祭の日、各区から集結した岩山が会場に勢ぞろいしました。その高さ、約15メートル。合戦記や物語を題材にした巨大な岩や人形、五色の紙すだれ、「ホテ花（ボテ花）」と呼ばれる装飾がびっしりと施され、色とりどりの幕と相まって、豪華絢爛なその姿は、見上げる人々を圧倒しました。

そして、大祭後半——待ちに待った「突き当て」。一本の綱に全体重をかけ、巨大な山車を前へ、前へと進めます。太鼓と鉦が鳴り響くなか、その一瞬だけ、あたりから音が遠のいたように感じる。次の瞬間、4トンの山車同士が真正面から激突しました。地を

揺らす衝撃に、会場の熱気は一気に頂点へ達しました。

また、この綱を引くために

祭りが終われば、町はいつもの静けさを取り戻します。けれど、綱を握った手の感覚も、山車がぶつかり合ったあの衝撃も、そう簡単には消えません。

苅田山笠は、町の歴史と人々の思いを映す「生きた芸術」です。引く人、支える人、見守る人——そのすべての力が一つになったとき、祭りは今年もまた、確かな輝きを放ちました。

そして、その熱は、次の秋へと受け継がれていきます。進め。ただ、前へ。——この町が続くかぎり、苅田山笠の物語は、これからも紡がれ続けていくのです。